

国後島ポンキナシリ遺跡の再吟味

長山明弘

はじめに

本稿では、昭和初期に調査された国後島ポンキナシリ遺跡と、その研究に関係した人々の動向を整理するとともに、採集された土器について若干の分析を行なう。採り上げる資料は、層位や出土状態に関する記録が充分残されていないものが殆どである。従って、その年代的な位置付けに関しては、柳澤清一氏による編年学研究（柳澤 2008c・2011）に準拠し、先史考古学の伝統的な方法論（長山 2014a・b など）に則って、個別に検討を進める。なお、本稿では研究史を扱うという性格を鑑み、先学諸彦の敬称を略するとともに、歴史著述上の対象として記述する場合がある。予め、ご寛恕を乞う次第である。

1. 研究史の整理

国後島ポンキナシリ遺跡の出土遺物、そのなかでも「動物意匠を有する注口・把手付土器」は、発見された当初から特別な関心を集め、道内の展覧会に出品されたり、様々な機会を通して直接、間接に紹介されるなどした¹⁾。ここでは講読の便宜を図るために、ポンキナシリ遺跡の出土資料に関する研究の流れについて、簡単に記しておきたい。なお、より細かな内容については「附表」にまとめている。本文と併せて参照されたい。

国後島ポンキナシリ遺跡の出土遺物は、1928（昭和3）年6月から7月にかけて採集された。この経緯は調査者のひとりである近江正一によって記録され、喜田貞吉、そして河野常吉に書信として送付された。河野は同年（昭和3）秋、国後島を訪問し、出土遺物の寄贈を受けた（平光 1929b:196）。一方、同年（昭和3）10月、喜田は自らが主宰する『東北文化研究』誌上で、近江の書信の内容を紹介した。この速報では、「動物意匠を有する注口・把手付土器」の線描画が示され、その特性に焦点を充てて喜田が所感を述べている（喜田 1928）。

同じ頃（1928年8月）、「千島アイヌ」の形質を調査するため根室から色丹島を訪れた平光吾一は、調査の合間に遺物の採集を行なっていた（平光 1928:515）。平光は、千島列島における鳥居龍藏の考古学的な調査（鳥居 1903:199 など）に疑問を感じていた。また北海道において、同じ分野を専門とする清野謙次が考古学的な調査を進めていること（清野 1928a・b など）にも刺激された。平光は自ら採集した根室弁天島と色丹島、そして河野常吉が所蔵する国後島ポンキナシリ遺跡の出土遺物を『人類学雑誌』で紹介し、これらの不備を補うことを考えた。平光の遺物に対する考え方は、明治期以来の所謂「日本人種・民族論」に基づくもの（長山 2010:補註 48, 長山 2014b）であったが、この論考によってポンキナシリ遺跡の存在は多くの研究者に知られるようになった。

その後、「動物意匠を有する注口・把手付土器」は、紆余曲折を経て北海道帝國大學農學部附属博物館（現北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園）に寄贈され、さらに多くの文献で採り上げられるなどした。また、長らく線描画と写真のみで供覧されてきた「動物意匠を有する注口・把手付

土器」だったが、1982（昭和57）年10月、右代啓視が資料を細かく観察し、はじめて精細な実測図を作成した（右代1982）。1989（平成元）年3月には、五十嵐国宏が千島列島で出土した「オホーツク式土器」を集成し、それまで未公表だったポンキナシリ遺跡の出土遺物についても資料化して紹介した（五十嵐1989）。

2. ポンキナシリ遺跡の調査と関係する人々（第1図）

1) ポンキナシリ遺跡の調査経緯

ポンキナシリ遺跡は、国後島南部の太平洋岸、旧 国後郡泊村字ポンキナシリに所在する²⁾。1928（昭和3）年6月上旬、作喜尋常小學校代用教員の安田清一が泊村東拂（セルノヴォック）で二重堀のチャシ（東拂チャシ）を発見した。その後、東拂湖（パスチャナエ）付近の堅穴（東拂湖畔堅穴群）³⁾で完全なかたちの石皿を掘り出し、さらに熱心に「先住民族」の遺跡を踏査していた。やがて思いがけず、作喜尋常小學校裏の崖上に堅穴が存在することを発見した⁴⁾。

安田は、考古学の心得がある校長の近江正一に鑑定を請い、長方形の堅穴を16軒確認するに至った。以来、瑪瑙製4個を含む石器14個、石斧2個、石槍4個、大小併せて6つの土器を発掘した。さらに7月7日、安田と近江はポンキナシリ遺跡でもっとも大きく深い堅穴を調査していたが、午後4時頃、注ぎ口と把手部分に動物を象った注口付土器（第3図26）を発見した。この土器には「茶碗型土器」（第3図13）が伴っていたと云う。これらの遺物は、縦3.5m×横4.6m、深さ1mほど⁵⁾の長方形を呈する堅穴の東側面⁶⁾、地表面から約1.2mの深さで検出されている。

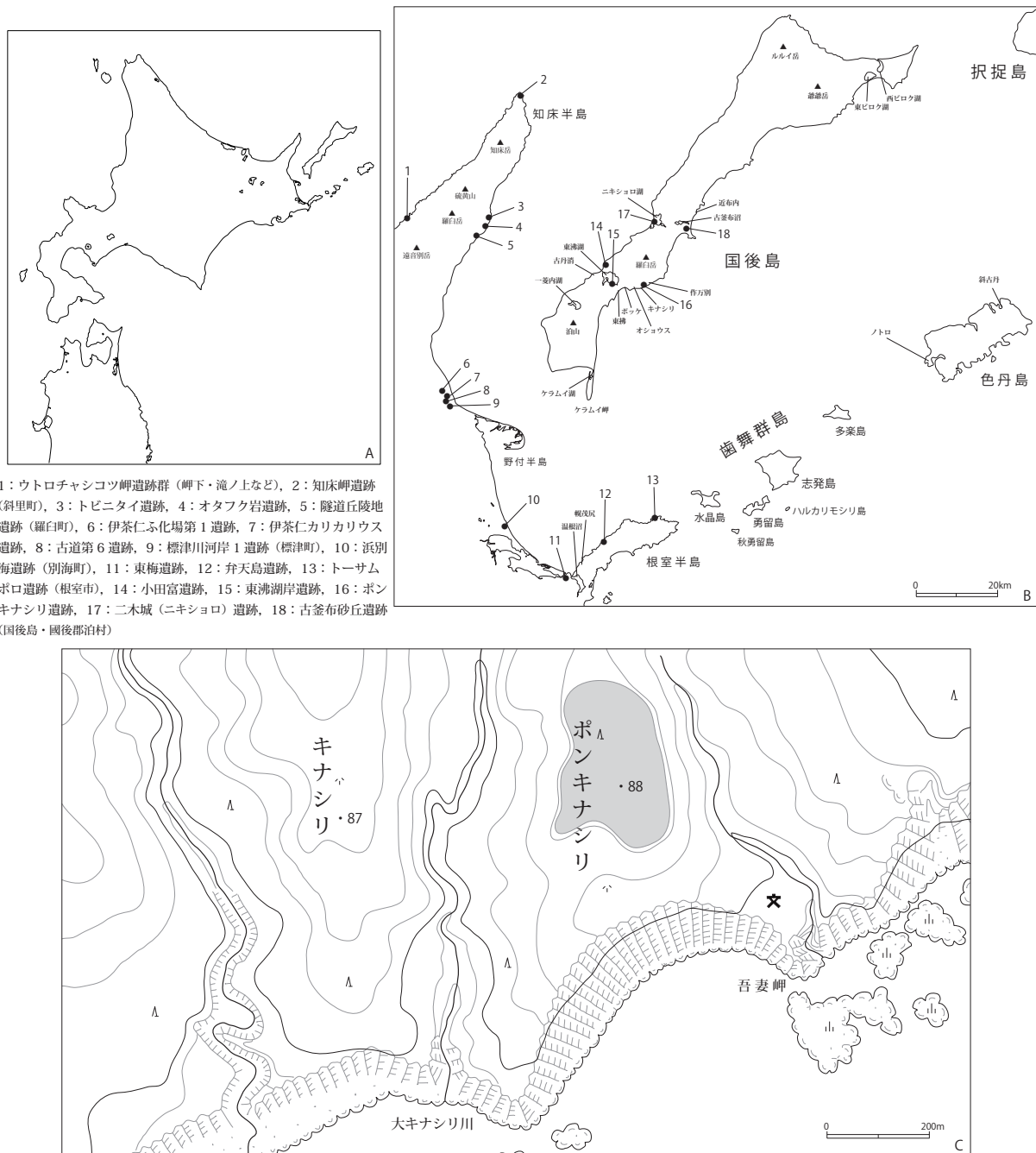
2) ポンキナシリ遺跡の調査研究に関係した人々

近江正一（1897 - 1964）

近江正一は、北海道増毛郡増毛町別荘で生まれた（杉浦1991：2）。北海道廳立旭川中學校（現 旭川東高等学校）を卒業（第7期）し、札幌師範學校本科第二部（現 北海道教育大学教育学部）に入学。1916（大正5）年3月、同校を卒業（第8回）し（北海道札幌師範學校1936：136）、早稻田大學英文科に学んだと云う（近江1931：齋藤讓三による序文）⁷⁾。大学を2年で中退（杉浦1991：2）した後、1919（大正8）年頃に旭川新聞社に入社。社会部の記者として「前世紀の旭川－アイヌ種族の傳説－」と題し、旭川アイヌの口碑・伝説などを紹介する記事を連載している⁸⁾。

その後、1926（大正15）年頃から1927（昭和2）年にかけて、根室の北斗尋常小學校⁹⁾に訓導として赴任し、1928（昭和3）年から翌1929（昭和4）年まで国後島作喜尋常小學校訓導兼校長、また中古丹尋常小學校校長を勤めている¹⁰⁾。著作『傳説の旭川及び附近』（1931年7月6日発行）をまとめる前後に教職を辞し、再び旭川新聞の記者となったようである（近江1931：蘆田省三による序文）。

その後の消息は充分調べられていないが、1939（昭和14）年頃には、上川地方北部の音威子府尋常高等小學校（現 音威子府小學校）教員として、「道北先史研究会」の発会に参加し（9月3日）、その中心的な役割を担ったと云う（杉浦1991）。また、1943（昭和18）年には、旭川第三國民學校（現 旭川市立第三小學校）の校長となっている。その後も上川管内の小學校長を転々としたようである（野村1992：



第1図 本稿で対象とする主な遺跡とポンキナシリ遺跡周辺図

表紙裏)。

また、1954 (昭和 29) 年 4 月『アイヌ語から生れた郷土の地名と伝説』(上川地区学校生活共同組合) を上梓した。この著作には、上川管内で採集された考古資料の写真と線描画が掲載されている (杉浦 1991: 註 4)。近江は、1958 (昭和 33) 年 3 月、南富良野町立幾寅小学校校長を最後に退職している。遺跡や遺物に対する関心は、終生持ち続けていたようである (岸本・山下編 1968: 33-34, 51)。千島出土の遺物若干も含めて、旧蔵資料は「近江コレクション」として南富良野町総合福祉センター (当時) に収蔵・陳列されたと云う (杉浦 1991: 3)。この施設は現在改組されている。資料の現状については調べが済んでいない。晩年、近江は旭川に戻り、東神楽町で亡くなったと云う (野村 1992: 表紙裏)。

安田清一

安田清一は、国後島キナシリにあった大漁場の長男として生まれ、北海道廳立根室商業高等學校（現根室高等学校）を卒業した（松井 1977：164）¹¹⁾。1926（大正 15）年頃から作喜尋常小學校の代用教員を務め、1929（昭和 4）年頃に訓導となった。その後も長く同校で教鞭を執ったが、1935（昭和 10）年に古釜布尋常高等小學校に移動し、1939（昭和 14）年頃には、古丹消尋常小學校校長となった（千島教育回想録刊行会 1977）。

松井彦松（1900 - 1978）

松井彦松は、1900（明治 33）年、石狩郡石狩町（現 石狩市）に生まれた。1920（大正 9）年 3 月、札幌師範學校本科第一部（第 34 回）を卒業（北海道札幌師範學校 1936：119）。その後、空知管内の小學校に訓導として赴任。1927（昭和 2）年 5 月からは国後島に渡り、作喜尋常小學校校長として勤務。翌 1928（昭和 3）年 5 月、古釜布尋常高等小學校の訓導兼校長となる（松井 1977：163）¹²⁾。松井は作喜（ポキナシリ）、国後島中部のニキシヨロ（二木城）、チカップナイ（近布内）などで貝塚や竪穴を発掘し、土器・石器・骨角器など 2000 点あまりを所蔵していた。しかし、1930（昭和 5）年 1 月 5 日、古釜布尋常高等小學校が焼失し、これらの遺物も失われた（松井 1977：166-167）¹³⁾。

河野常吉（1863 - 1930）

1928（昭和 3）年 3 月下旬、河野常吉は道東部の調査に赴いた（石村 1998：470）。この調査は、啓明會が助成する「[アイヌ] 調査事業」に関連するものと推定される¹⁴⁾。河野は、根室で福士スミからアイヌ語の聞き取り調査を行なっている¹⁵⁾。調査には当時、和田小學校校長だった伊藤初太郎が同道した（伊藤 1935：20）。また、同じ年（1928）の秋、河野は北見方面や国後島へ出張している¹⁶⁾。調査の詳しい内容は不明だが、この調査の際に、ポキナシリ遺跡の出土資料について寄贈を受けたものと推定される（平光 1929：196）。その後、この資料は分割され、著名な「動物意匠を有する注口・把手付土器」など（第 2 図 10、第 3 図 4・13・26）は北海道大學農學部附属博物館に寄贈、その他の遺物（第 3 図 19 など）は河野家に残されたものと考えられる¹⁷⁾。

平光吾一（1887 - 1967）

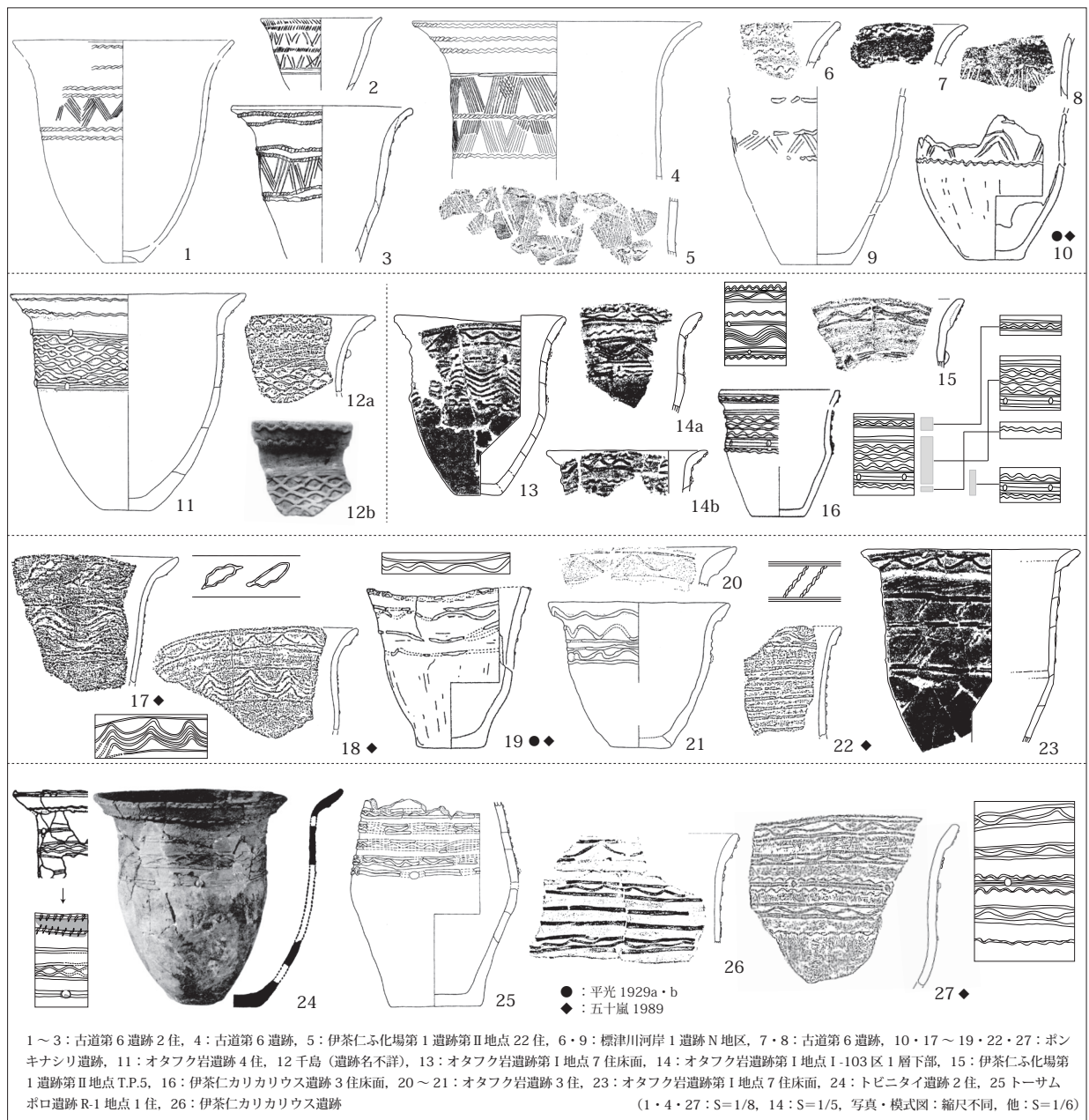
平光吾一は、北海道帝國大學醫學部解剖學第二講座の初代教授（在任：1922-1929）である。1928（昭和 3）年 8 月 19 日から 27 日にかけて、千島アイヌの調査のため色丹島に赴き、生体計測や健康診断、血球凝集反応検査、撮影などを行なうとともに土器の破片などを採集した（平光 1928：515）。また、おそらく色丹島に渡航する前に、弁天島貝塚で土器片や石器類を表採している。平光は、先史時代の千島列島に関する調査研究に不備があることを指摘し、所謂「日本人種・民族論」の系譜に連なる学問的な野心（ambitious）を持って筆を進めている（平光 1929a～d）。一連の論文で平光が紹介した資料のうち色丹島の土器片は、平光とグブラー¹⁸⁾、弁天島貝塚の土器片は、平光の採集に拠るものである。しかし、ポキナシリ遺跡の出土土器は、平光が採集したものではなく河野常吉所蔵の資料を観察したものである¹⁹⁾。

3. ポンキナシリ遺跡から採集された土器群について²⁰⁾

1) 「トビニタイ土器群Ⅰ」と「トビニタイ土器群Ⅱ」(古・中) (第2図)

ポンキナシリ遺跡からは、「トビニタイ土器群Ⅰ」が一個体採集されている。10例は、やや幅のある底部から緩やかに立ちあがり、胴部の最大径となる部分(以下、「腰」と表現する)で若干内に入る。腰の部分に界線(劃線)として「指壓式浮紋」をめぐらせ、その上位に3条の鋭い沈線によって粗雑な鋸歯状文を描出する。おそらく頸部上半にも貼附線を附加し、①単帯(1・3)、②複帯(4・5)、③文様細帯のあいだに無紋帯を排置し多帯とする(8・9)、いずれかの構成を採るものと推定される。

また口縁部は、1・3・4例などと同様に断面が肥厚せず大きく開き、2~3条の「指壓式浮紋」ないしは擬縄貼附紋を排列する構成が考えられる。「トビニタイ土器群Ⅰ」の文様・装飾には、いくつ



第2図 ポンキナシリ遺跡出土土器と参考資料(1)

かの系統がある。個体によって、底部の形態や幅が異なることも、意味のあることである。道東部（標津・根室など）では、頸部の文様帯に鋸歯状文を選択する個体が目立つ。そのなかでも4例のように文様細帯を上下に反復する構成が好まれる。一方、単帯の鋸歯状文は、道東部の擦紋Ⅳ（後半期）に一般的だが、複帯や多帯構成は稀である。これら頸部に排置される沈文は基本的に道東部の擦紋Ⅳ（系統）から分岐したものだが、文様帯の構成法については系統分岐以後の工夫を考慮すべきかもしれない。

12例は、東京帝國大學人類學教室の所蔵品で、戦前から知られた資料である。遺跡名は分からないが、千島出土とされている（杉山1928：第71圖版）。拇指状に肥厚する口縁部文様帯には、「指壓式浮紋」が2条めぐる。頸部には、直線貼附紋を3条施し（劃線）、その内部に一山ずつずらした波線を排列する。これらは全体として一帯の網状文様を形づくる。11例は、界線が2条である点が異なるものの、12例と近似する資料である。13～15例もこれらに類似した個体群で、「トビニタイ土器群Ⅱ」（3）～（4）類に比定される。16例については、前稿でも論及している（長山2014a：154-155）。第2図2段目の資料に共通して認められる「密接する直線+「象形紋」」（長山2015a：277）という組み合わせは、北見・知床方面の「トビニタイ土器群Ⅱ」に類例が多く、その系統の内部で工夫されたように考えられる。

17・18、19例はポンキナシリ遺跡から採集された「トビニタイ土器群Ⅱ」（5）類に比定される資料である。17例は「指壓式浮紋」で形づくられた「木の葉状」の装飾意匠を口縁部に附加する。口縁部の「指壓式浮紋」を様々に工夫する資料は、羅臼町オタフク岩遺跡第Ⅰ地点9住（涌坂1991：第14図17）、標津町古道第6遺跡23住（梶田2013：第60図4）などに類例がある。「木の葉状」の装飾意匠は、理論的には23例（模式図）の胴部にあるような「区切り斜線」（柳澤2001：84-93など）の線端を連結することで形づくられると考えられる。

一方、頸部では上下に直線を貼附して横帯をつくり出し、その内部に4条の波線を近接して排置する。また、文様帯の下位に直線を附加して界線（劃線）としている。18例の頸部文様帯も、ほぼ同様な構成を採るが、「指壓式浮紋」を界線とする。「トビニタイ土器群Ⅱ」では、寧ろこちらの構成の方が一般的である。この土器の口縁部には「直線+波線+直線」貼附紋（以下、「貼附紋」を略する）を単位とする狭い文様帯（文様細帯）が排置される。波線は、頸部のものと同様に波頭が高く、いびつにうねる。

19例は、底部からほぼ垂直に立ちあがる。この特徴は後述するソーメン紋土器3（第3図19・20）に類似する。但し、ソーメン紋土器とは異なり、胴部は外側に開いて直線的に口端へと至る。口端は平らで、口縁部は肥厚せず、頸部とのあいだに明瞭な区別もない。総体的に視て、19例はやや特異な土器と云える。文様は口端に「指壓式浮紋」をめぐらせ、体部には直線、或いは「直線+波線」を組み合わせた文様細帯を2つ排置し、腰の位置に界線（劃線）として直線貼附紋を附加する。土器の系列は異なるが、文様の構成は21例に似る。

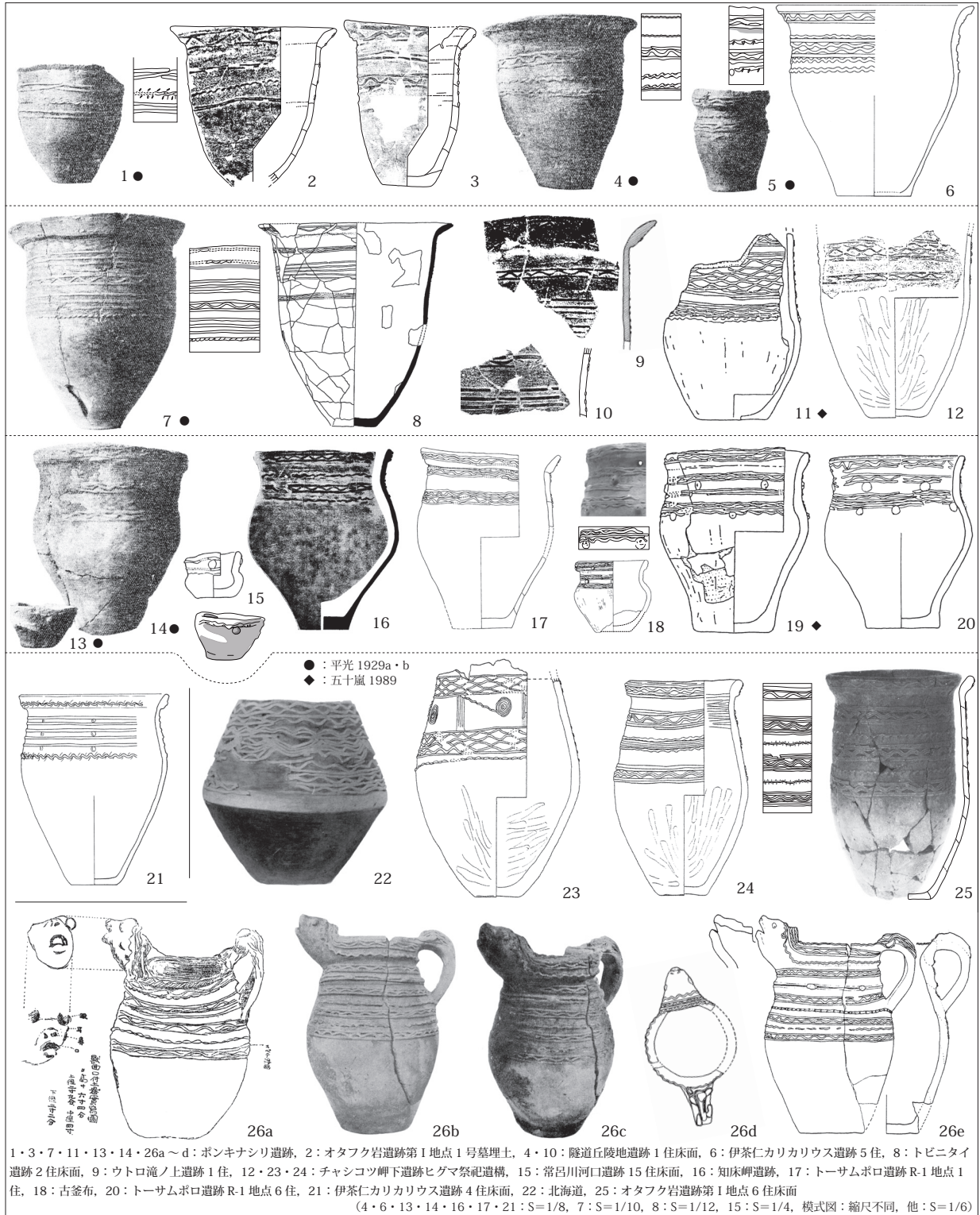
第2図3段目の個体群に共通するのは、やや弛緩した描線の構成法である。こうした形質は新しい段階（第2図26・27、第3図8）にも系統を越えて続くので、必ずしも時期差を示すものではない。しかし、北見・知床・標津方面の「トビニタイ土器群Ⅱ」（4）～（5）類の時期に比較的目立つ特性であると云えるだろう。

2) 「貼附式浮紋土器」の「新しい部分」、及び「最も新しい部分」（第3図）

1例は、一定の間隔を空けて2条一単位の直線貼附紋を施し、そのあいだに「指壓式浮紋」を排置

する（柳澤 2008b : 83）。直線貼附紋には「らせん技法」（青柳 1996）が用いられ「指壓式浮紋」には爪痕が残る。破断しているが、頸部には細帯がもう一段めぐるかもしれない。また口縁部は②・③例のように「直線+波線+直線」を基本とする文様細帯を排置するか、④例のように「指壓式浮紋」を2条めぐらせるか、そのいずれかと推定される。

4～6例は、細帯（「直線+波線+直線」）の位置こそ異なるが、貼附線（直線・波線・「指壓式浮紋」）の



第3図 ポンキナシリ遺跡出土土器と参考資料(2)

組み合わせ方に共通するところがある。第3図1段目の各個体には、若干の時期差が想定されるだろう。しかし、いずれも「直線+波線+直線」をひとつの単位とし、その排列の工夫によって文様装飾を構成する、より新しい段階（第3図中・下段）に通有な手法は充分確立していない。これらの資料は、概ね「トビニタイ土器群Ⅱ」（6）類（＝「カリカリウス土器群」（6）類）に比定されるものとする。

7例はポンキナシリ遺跡の出土資料のなかで最も大型の甕形土器である²¹⁾。非常に小さな底部から緩やかに立ちあがる。頸部はほぼ直立し、口縁部は外に開く。最大径は口縁部にある。文様は、腰の位置に擬縄貼附線を施し（界線）、口縁部にも同じ貼附線を2条めぐらせる。頸部では「直線+波線+直線」（文様細帯）の上下に3条を一単位とする直線貼附紋を配置する。

第3図2段目に排列した個体群は、貼附線の組み合わせによって一単位の文様細帯を形づくり、一定の間隔を空けて排列するものである。但し、貼附線の形態は様々で、文様細帯の幅も整齊ではない。なお、7～10例などに特徴的な並行線は、本来は「カリカリウス土器群」（21＝「カリカリウス土器群」（1）類）に伝統的な文様要素である。2段目の個体群は、「トビニタイ土器群Ⅱ」（7）類（＝「カリカリウス土器群」（7）類）に比定される。

ところで、ポンキナシリ遺跡出土の11例は、他の土器と比べて腰の位置がかなり下にある。これは「トビニタイ土器群Ⅱ」（7・8）、「オホーツク式土器」（16・20）、「カリカリウス土器群」（21→8）、そのいずれとも異なる。但し、腰の高さには違いがあるものの、底部の大きさや立ちあがり方、文様の構成法などは25例や24例など4段目の個体群と類似する部分があると云えるだろう。

13例は、ポンキナシリ遺跡の竪穴から26例とともに出土したと推定される土器である。このような鉢（碗）形の土器は、土師器や擦紋土器、或いは「オホーツク式土器」の古い部分（刻紋土器A・B）の内部で一定の「比例」（割合）を占める。「貼附式浮紋土器」の段階では、手びねりによって作られたような小型土器（15）がある。一般にこうした土器では、貼附紋による装飾は揮わないが、目梨泊遺跡（枝幸町）の包含層にいくつか類例がある（佐藤1994：第135・136図1；長山2015a：第2図18）。

14例は、やや幅のある底部から絞りあげるようにして形を整え、腰の位置（胴部最大径）で短く膨隆する。頸部は若干内側へ傾きながら立ちあがり、僅かに外反する口縁部につながる。口縁部から頸部にかけて「直線+波線+直線」を基本とする文様細帯を2～3帯排列し、各細帯のあいだに「指壓式浮紋」（16）や「象形紋」（18～20）などが施される（長山2015a：277）。また細帯を合着（cohesion）させ、特徴的な文様（直線を軸として波線貼附紋が線対称に配置される）を形づくる個体がある（17・19・20）。こうした合着文様はソーメン紋土器2にも認められる（野村・平川1982：第11図4など）が、「角状突起」（長山2015a：第6図2・4）など関係して、より新しい段階に目立つようである。

26例は、ポンキナシリ遺跡の出土遺物のなかで最も著名なものである。発見の経緯やその後の研究の流れについては先述した。また、この資料の形質（文様装飾、突起・把手など）に関しては前稿でも論及している（長山2015a：277-278）。道東部では、文様装飾に「貼附式浮紋」を用いる三系統の土器、①「オホーツク式土器」（ソーメン紋土器）、②「トビニタイ土器群Ⅱ」、③「カリカリウス土器群」が存在し、これらは年代的にはほぼ並行しながら変遷すると考えられる（柳澤1999・2008bなど、長山2014a）。

26例は「直線+波線+直線」を基本的な単位とする整齊の文様細帯を幾重にも排列する。こうした特性から、「貼附式浮紋土器」のなかでも最も新しい部分に比定される。その器形は背の高い紡錘形を呈する。これは、腰の部分（胴部最大径）を軸として上下に線対称となる特徴的な形態である。腰

の高さは大きく異なるものの、伝統的に胴部最大径を示す部位で逆「く」の字型に屈曲する器の特徴は、「カリカリウス土器群」(21)に通有なものである(柳澤 2008a: 26)。第3図の4段目に26例と類似する個体群を排列した。これら(22~25)はいずれも「貼附式浮紋土器」の最も新しい部分に並行する資料である。

おわりに

文書による記録や言い伝え、或いは日常的な生活経験から、南千島と根室をはじめとした「環根室海峡圏」(柳澤 2012)に密接な関係(「交通」)があることは、古くから指摘されてきた(伊藤 1935: 22, 25-26 など)。昭和初期、長尾又六、伊藤初太郎ら根室在住の「先生」(郷土研究者)たちは「環根室海峡圏」で出土する遺物の集成を進めた。彼らを指導した清野謙次は、自身の調査旅行を通じた知見からこれらの遺物を広く比較・対照した結果、「釧路、厚岸、根室地方は南千島と近い関係があつて、同一文化系統圏内に入れて攻究す可きものなる事が分つた」と述べている(清野 1928b: 122-123)。

本稿では、これまでに公表されているポンキナシリ遺跡の出土土器を一覧し、これらと形態、文様・装飾などが類似する個体群を選択して、形態学的に比較・検討しながら論を進めた。「貼附式浮紋土器」の新しい部分では、各土器群(系統)の内部で、文様装飾、器形などが相互に似通った個体の「比例」(proportion)が増加する。この現象は、南千島及び道東諸地域の「交通」(communication)が盛んになり、集団の取り結ぶ関係性が従来よりも濃密になったことを示している(imply)と考えられる。

材質、習俗、習慣、言語、そして集団が日常的に使用した道具類が相互に類似することからも、「環根室海峡圏」を往き来した集団の関係が、①→②という直列的なものでは無かったことは確かである。それでは、こうした遺物に表れた(imply)形態的な、或いは数量的な変化の背景にはどのような事柄(現象、出来事)が考えられるのであろうか。先史考古学の方法論(長山 2014a・b)を基礎として、関連する諸科学の援けも借りながら、それらをより闡明する理論を構築していくことが将来的な課題としてであると云える。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、旭川市博物館において「ウトロチャシコツ下」遺跡の遺物をはじめ、河野常吉・廣道氏の旧蔵資料を観察する機会に恵まれた。資料調査において様々な配慮を頂き、調査成果の公表を快くお許し下さった旭川市博物館の瀬川拓郎氏に心より感謝申し上げます。また、学説史の整理に関係して北海道立図書館北方調査室、旭川市図書館資料調査室にお世話になりました。記して感謝申し上げます。なお、編集に関係して柳澤清一先生、山田俊輔先生、岩城克洋氏、小林 嵩氏に様々なご指導・ご協力を頂きました。ここに記して深甚なる謝意を表します。

補註

- 1) たとえば、1931(昭和6)年10月17日から24日まで北海道帝國大學附属博物館と犀川會(「犀川」は河野常吉の雅号で、河野の没後その衣鉢を継ぐ人々が参会した)が主催した「第一回北海道先史時代遺物展覧會」(北海道帝國大學附属博物館・札幌市犀川會 1932)、犀川會と北海道廳學務課が主催し、1933(昭和8)年6月21日から8月15日にかけて、今井呉服店を会場に札幌・旭川・小樽・函館の各都市を廻って開催された北海道原始文化展覧會(犀川會 1933a)などが挙げられる。
- 2) 「ポンキナシリ」は、アイヌ語で「pon」(若い、小さい) + 「kina」(草、蒲) + 「sir」(土地) という意味である。
- 3) () 内に記したロシア語地名は筆者、遺跡名の比定は宇田川 洋に拠る(宇田川校註 1983: 54)。
- 4) 本文中に記した調査経緯(とくに時日、前後関係)については、若干の疑問がある。それは、①河野常吉の旧蔵資料に「昭和3年6月」

以前の目付を記した遺物があること、②近江正一の前任者である松井彦松（後述）が、ポンキナシリ遺跡の出土土器を寄贈していること（補註17参照）、に拠る。①について、河野常吉旧蔵資料を含む「市立旭川郷土博物館所蔵考古資料目録」（平成5年4月1日現在）では、ポンキナシリ遺跡の出土土器（おそらく破片資料）の一部に関して、備考欄に「S. .5.12～13」, 「S.3.5.15」と記載がある。これは、もともと遺物に貼附されていた紙片などの記載内容を書き写したものである。この記載に順えば、ポンキナシリ遺跡から出土した資料の一部は「1928（昭和3）年5月」に採集されていることになる。なお、2014年10月29日から11月2日にかけて旭川市博物館で河野常吉・廣道氏の旧蔵資料を調査する機会に恵まれた。「市立旭川郷土博物館所蔵考古資料目録」は、この際に閲覧したものである。ポンキナシリ遺跡の出土土器についても探索したが、展示された一個体（第3図19例）を除いて、実見できていない。資料調査においては、旭川市博物館の瀬川拓郎氏に様々なご協力を頂いた。ここに記して深甚なる謝意を表す。

- 5) 原文では、堅穴は「間口四米五分ノ三、奥行三米二分一、深サ一米で、遺物は地面上から一米五分ノ一のところから（中略）発見された」と記されている（喜田1928：55）。『河野常吉ノート』もほぼ同じ記載内容である（宇田川校註1983：54）。ふつう間口は「間・尺・寸」で表す。「間口四米五分ノ三」を尺貫法による表記とした場合、メートル法と尺貫法が混用されていることになる。また「五分ノ三」が尺貫法の「5分3厘」を意味すると解釈した場合、メートル法に換算すると「16.059mm」となり、記録として不自然である。
- 6) 近江に拠れば、この地域の堅穴では「土器は東壁又は西壁に限つて発見される」特徴があると云う（喜田1928：55）。
- 7) 典拠は不明だが、杉浦重信は、近江が学んだのは英文科ではなく「史学科」としている（杉浦1991：2）。
- 8) 著作の序文では「前世紀の旭川と題し回を重ねる事三十幾回」と記載されている（近江1931：齋藤讓三による序文）。しかし正確には、大正9（1920）年9月25日から10月23日まで26回にわたって連載され、その際には本名ではなく筆名として「篤彦生」を使用したことが判明している。これは、北海道立図書館北方資料室、および旭川市図書館資料調査室に照会し、ご教示頂いたものである。ここに記して両機関のご尽力に感謝申し上げる。
- 9) 北斗尋常小學校（1902年9月創立）の初代校長は、長年にわたって弁天島貝塚を発掘し、考古学にも造詣が深かった郷土研究家の長尾又六（1872-1955）である（右代1996：71、大沼・川上ほか2001：45-47、長山2015a：補註11）。近江正一の根室在勤当時（1926・1927年）、長尾は花咲尋常高等小學校（北斗小から直線距離で約1km）で教鞭を執っていた。また、弁天島をはじめ根室半島周辺の発掘を行ない、採集した遺物の供覧会を何度も開いていた。一方の近江も、根室赴任後に弁天島貝塚を発掘している。近江は、この時発掘した土器を北海道帝國大學醫學部解剖學教室、骨角器を東北帝國大學法文學部奥羽史料調査部に寄贈している（山本1929：「圖版説明」）。これは長尾や佐竹溪谷、伊藤初太郎らが参加した清野謙次の弁天島発掘（1926年8月11・12日）の影響で地元にわき起こった考古学熱の高まりと相関するものであろう。なおこの時期、長尾や近江をはじめとして根室近在の住民によって掘り出された遺物は、喜田貞吉が出張（1931年7月頃か）して買い求めたと云う（清野1969：518）。年齢は親子ほども違うが、長尾と近江は同じ根室で教員として勤務し、遺物や遺跡に深い関心を持つという共通点があった。また、近江の作喜尋常小學校赴任後（1928年8月）、長尾が国後に渡航し、松井彦松とともに古釜布貝塚（第1図B）を発掘するなど、陰に陽に接点が認められる。近江が、道外にも知られた著名な遺物収集家であった長尾の存在を知らないはずもないだろうが、両者の交流を示す記録は残されていないようである。
- 10) これは、北海道聯合教育會が編纂した職員録（北海道聯合教育會編1926：55、同1927：149）、及び千島教育回想録刊行會が編纂した「千島教育関係教職員録」（千島教育回想録刊行會1977：587）に拠るものである。一方、杉浦重信は、近江の国後島への赴任について「根室管内の小學校に赴任したが、この時、夏期だけ開校する国後島の分校でも教鞭をとっており」と述べている（杉浦1991：2-3）。この記述の出典は不明だが、作喜尋常小學校は分校（分教場）ではなく、『千島教育回想録』を閲しても該当する内容は認められないので、疑問に思われる。ところで、近江の在勤中（1927年9月26日）、北斗尋常小學校は火災で全焼している。新校舎は翌年（1928年11月3日）に落成する（大沼・川上ほか2001：54）が、或いは近江の国後島赴任は、これと関係があるのかもしれない。なお、『北海道教育関係職員録』の記載内容については、北海道立図書館北方資料室の教示を受けた。記して謝意を表す。
- 11) その姓、また出身地から推せば、安田清一は泊村村会議員を務めた安田春吉の子息と推定される。安田清一の生年や高等学校を卒業した年などは調べが済んでいないが、1915（大正4）年7月から1924（大正13）年8月まで（おそらく安田の就学期間にかかる）、根室商業高等學校には長尾又六が教員として勤務していた。
- 12) 古釜布尋常高等小學校には、後に国後島をはじめ北方領土や知床に関する書籍を多く物し、旧羅臼村長も務めた村田吾一が1928（昭和3）年12月に赴任している（はじめは近布内の分教場で教鞭を執り、1929年4月より本校勤務となる）。村田については、以下の文献（村田・本田1969、千島教育回想録刊行會1977、本田・村田1980）も参照。
- 13) 平光吾一が紹介したポンキナシリ遺跡の出土土器（平光1929a・b）は、大半が近江正一の寄贈に拠るものである。しかし、1点

だけ「松井氏寄贈」とされる土器がある（平光 1929b：197-198；第8圖 K-5 = 第3図7）。この当時（昭和3年）、作喜尋常小學校には代用教員として「松井きね」が在職していた（千島教育回想録刊行会 1977：587）。また、この他にも松井姓の住民が居た。しかし、本人の回想、遺跡や遺物についての興味・関心（松井 1977：167）から推せば、この「松井氏」とは「松井彦松」を指すと考えることが自然であろう。

- 14) 啓明會は「特殊ノ研究、調査、著作ヲ助成シ及發明發見ヲ獎勵スルコト」を目的として 1918（大正7）年に設立された。河野常吉は、1919（大正8）年3月から「アイヌ」調査事業に関する啓明會の研究助成を受けていた。この事業は「アイヌ」ノ歴史及風俗ニ關スル精確詳細ナル調査書ヲ編纂セントスルモノ」で、「調査期間ヲ滿三ヶ年トシ、本會ハ其ノ經費トシテ總額金四千七百七拾六圓ヲ補助スルコト」とされていた（『財團法人啓明會第壹回大正七、八年度事業報告書』（1926年発行）：3-4）。しかし、河野は「古代アイヌの状況」に関する研究に難渋し、報告書の編集は進まなかった。当初3年間で成果報告を行なう予定であった事業は、延期に延期を重ね河野の逝去（1930年9月3日）まで継続された。こうした点も含めて、河野と啓明會の関係については石村義典の著作に詳しい（石村 1998：345-362）。河野常吉に関する本稿の記述内容は、石村の著作に多くを負っている。
- 15) 福土スミは、この当時、幌茂尻地区（根室市）に住んでいたポロモシリアイヌの婦人（当時84歳前後）で、1930（昭和5）年に逝去している（伊藤 1935：20、豊原・川上・本田 1996：92）。
- 16) 詳しい経緯などは不明である。しかし、①平光吾一による説明（1929b：196）、②河野常吉と啓明會との往復書翰に、「昭和三年ノ事業ハ実地調査ニ重キヲ置キ春ハ根室方面、夏ハ室蘭方面、秋ハ北見国ノ一部並ニ千島国国後島へ出張致シ候」という記述があること（河野編 1984：59）、③啓明會の助成に対する年次報告のなかで、1921（大正10）年以降、「室蘭、十勝、釧路、厚岸等ニテ實地ノ踏査ヲ爲シ堅穴、貝塚及ヒ遺物等ノ調査ヲ遂ケ新ナル資料ヲ得」たことを記し（『財團法人啓明會第參回大正拾年度事業報告書』（1926年発行）：8-9）、さらに 1923（大正12）年には調査した地域に「日高、膽振」（『財團法人啓明會第五回大正拾貳年度事業報告書』（1926年発行）：12）が、また 1935（昭和3）年には「根室、北見、千島、國後島」（『財團法人啓明會第拾回昭和三年度事業報告書』（1935年発行）：43）が追加されていること、④ 1930（昭和5）年2月発行の『日本地理大系 10 北海道、樺太篇』のなかで、河野が國後島に関する項目の一部を担当していること（山本編 1930：232-233）、などが根拠となる。なお②の記述内容については、北海道立図書館北方調査室の教示を受けた。記して謝意を表す。
- 17) 河野常吉は、日々の出来事や調査の記録などを多く書き残している。しかし、1928（昭和3）年以降の記録は殆ど残っていない（石村 1998：449）。このため資料が北海道帝國大學農学部附属博物館に寄贈された詳しい経緯は不明である。但し、おそらくこれには①北海道帝國大學農学部大学院を修了（1930年3月）して、助手となり（5月）、②河野常吉の逝去（9月3日）によって（河野広道博士没後二十年記念論文集刊行会 1984：462）、③「アイヌ」調査事業の残務整理を担うことになった嗣子廣道（『財團法人啓明會第拾六回昭和九年度事業報告書』（1935年発行）：35）の動向が関係しているように思われる。③に関して、啓明會では目に見えるかたちで「アイヌ」調査事業の総括を求めたと云われる。そこには、河野常吉が事業で蒐集した遺物の提出も考慮されていたらしい。困惑する河野家と啓明會のあいだに立って、ちょうどその頃考古学に関する専門的な論文を発表（河野 1932a・b）していた河野廣道こそが河野常吉の学問的な継承者であり、遺された資料を有効に活用できる人物であると説いたのは、金田一京助と柳田國男であったと云う（石村 1998：359-361）。一方、河野家に残された資料の多くは、現在、旭川市博物館（旧 市立旭川郷土博物館）が所蔵している。これは河野家三代にわたって断続的に寄贈されたもののようである。「市立旭川郷土博物館所蔵考古資料目録」（平成5年4月1日現在）に拠れば、河野常吉旧蔵と推定される國後島出土遺物には A「ボンキナシリ・「ボンキナシリ堅穴」、B「トウフツ」・「東拂堅穴」、C「古釜布」・「古釜布貝塚」・「古釜布アイヌ地貝塚」（古釜布砂丘遺跡）、D「オタトミ」（小田富遺跡）の各遺跡から採集された資料がある。上記「」内は「目録」に記された遺跡名で、略称または複数の呼び名が併用されている。（ ）内は、現在の呼称である。なお、B・Cの周辺地域では現在多くの遺跡が確認されているが、上記の遺跡がそのいずれに同定されるのかは充分明らかでない（右代・鈴木・村上ほか 2012 など参照）。以下に出土遺物を中心として、上記 A～D の遺跡についての概要を記す。A は完形のオホーツク式土器（2 個体）及び破片（20 点）、たたき石、凹み石、石鏃、石槍、ナイフ状石器（3 点）で、補註 4 で述べたように備考欄には「S. .5.12～13」〔「.」の間は空欄〕、「S.3.5.15 河野常吉」、「S.3.11」と記載されている。B は続縄紋・擦紋・オホーツク式土器片（16 点）で、備考欄には「S.3.6.6」と記載がある。C は続縄紋・擦紋・オホーツク式土器片（20 点以上）、石鏃、ナイフ状石器、骨角器（10 点）で、備考欄に「S.3.11」と記載されている。D には環石（2 点）、石鏃、という記載がある。このうち A の備考欄は、近江正一の調査記録（喜田 1928）に順えば、安田清一や近江正一が遺物を掘り出した日付を示すと考えられる。
- 18) 1925（大正14）年から 1932（昭和7）年まで、北海道帝國大學豫科にドイツ語教師として勤務していたアーノルド・グブラー（Gubler, Arnold）のこと。1928（昭和3）年7月半ばから8月にかけて色丹島を旅行し、ノトロで貝塚を発掘、地元の住民からノトロや斜古丹出土土器の寄贈を受けている（平光 1929a：134、同 1929b：193-194 など）。
- 19) 平光が、北海道帝國大學附属植物園の近くにあった河野常吉の家を訪問したのは、1928（昭和3）年10月頃から 1929（昭和4）

年3月頃のことであろう。それは①河野が道東調査を終えて帰札し、②平光が論攷の構想をまとめるとともに、③夫人の療養を兼ねて(米村1969:113-114)、北海道帝國大學醫學部解剖學教室から九州帝國大學醫學部解剖學教室第二講座に転任する(1929年3月31日付)までの時期である。

20) ポンキナシリ遺跡からは、続縄文土器(平光1929a:第2圖版K-10・12)、及び刻紋土器Aの破片(同:K-13、五十嵐1989:第9図92)も採集されている。これらは北見・標津・根室地方などで出土するものと基本的には変わらない。現状では数量的に限られているので、本稿では措く。なお平光吾一は、河野常吉が国後島から持ち帰った資料のなかに、口縁部に短い肥厚帯を有する「貼附式浮紋土器」があることを記している(平光1929b:194)。また北海道大学植物園・博物館の乾板資料には、細部が不鮮明ながら、千島出土とされる大型の刻紋土器Aや「トビニタイ土器群Ⅱ」(いずれも復原個体)などが並んだ写真がある(加藤編2012:図版206)。

21) この資料は「松井氏寄贈」とされている土器である。

引用・参考文献

- 青柳文吉1996「オホーツク文化の貼付浮文土器について」『古代文化』第48巻第5号37-47頁 財団法人古代学協会
- 五十嵐国宏1989「千島列島出土のオホーツク式土器」『根室市博物館開設準備室紀要』第3号9-37頁 根室市博物館開設準備室
- 石村義典1998『評伝 河野常吉』北海道出版企画センター
- 伊藤初太郎1933「先住民族史」『根室千島兩國郷土史』(本城玉藻編)34-41頁 本城寺
- 伊藤初太郎1935『考古學上の根室の遺物と遺跡』森田金藏
- 右代啓視1982「動物意匠を施した注口・把手付のオホーツク土器」『季刊 北海道史研究』第30号52-54頁 北海道史研究会
- 右代啓視1996「千島列島採集の考古資料—長尾又六コレクション—」『根室市博物館開設準備室紀要』第3号71-90頁
- 右代啓視・鈴木琢也・村上孝一ほか2011「北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり(Ⅰ)」『北海道開拓記念館紀要』第39号99-110頁 北海道開拓記念館
- 右代啓視・鈴木琢也・村上孝一ほか2012「北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり(Ⅱ)」『北海道開拓記念館紀要』第40号143-154頁
- 右代啓視・鈴木琢也・藪中剛司ほか2013「北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり(Ⅲ)」『北海道開拓記念館紀要』第41号59-82頁
- 宇田川洋1971「オタフク岩遺跡」『羅臼』羅臼町文化財報告1 羅臼町教育委員会
- 宇田川洋1989「動物意匠遺物とアイヌの動物信仰」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第8号1-42頁 東京大学文学部考古学研究室
- 宇田川洋1990「土器文様にみられる動物」『郷土と科学』No.102 2-7頁 郷土と科学編集委員会
- 宇田川洋2002「オホーツク「クマ祀り」の世界」『北の異界—古代オホーツクと氷民文化—』東京大学コレクションXⅢ(西秋良宏・宇田川 洋編)106-120頁 東京大学総合研究博物館
- 宇田川洋編1981『河野広道ノート 考古篇1—北海道東北部の考古学的調査—』北海道出版企画センター
- 宇田川洋校註1981『河野常吉ノート 考古篇1—北海道先史時代遺跡—』北海道出版企画センター
- 宇田川洋校註1983「土偶を具備したる土製壺発掘」(執筆者不詳)『河野常吉ノート 考古篇2—北海道先史時代遺物—』54-56頁
- 近江正一1931『傳説の旭川及其附近』旭川郷土研究會
- 大沼忠春1971「土器について」『浜別海遺跡—北海道根室国—』北地文化研究会報告第1集143-163頁
- 大沼忠春責任編集2004『考古資料大観』第11巻 続縄文・オホーツク・擦文文化 小学館
- 大沼忠春・川上淳ほか2001「長尾又六氏の業績(1)」『根室市博物館開設準備室紀要』第15号37-69頁
- 大沼忠春・川上淳ほか2002「長尾又六氏の業績(2)」『根室市博物館開設準備室紀要』第16号61-88頁
- 大塚和義1968「オホーツク文化の偶像・動物意匠遺物」『物質文化』第11号21-32頁 物質文化研究会
- 大場利夫1956「モヨロ貝塚出土のオホーツク式土器」『北海道大學北方文化研究報告』第11輯187-256頁 北海道大學
- 大場利夫1971「北海道周辺地域に見られるオホーツク文化—Ⅳ 千島—」『北方文化研究』第5号1-30頁 北海道大学文学部附属北方文化研究施設
- 加藤博文・内山幸子・木山克彦ほか2006「知床半島チャシコツ岬下B遺跡で確認したオホーツク文化終末期のヒグマ祭祀遺構について」『北海道考古学』第42輯129-134頁
- 加藤克2001「北海道大学農学部博物館所蔵考古学資料(1)」『北海道大学農学部博物館研究紀要』第1号19-33頁 北海道大学農学部博物館

- 加藤克編 2012『大学博物館所蔵古写真の現代的意義に関する研究』日本学術振興会科学研究費補助金(2009-2011 年度)基盤研究(C) 研究成果報告書 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園
- 岸本翠月・山下緑朗編 1968『富良野市史』第1巻 富良野市役所
- 喜田貞吉(近江正一 報) 1929「獸面口付壺型土器(千島國後島發見)」『東北文化研究』第1巻第2號 55-56頁 東北帝國大學法文學部内奥羽史料調査部編輯 史誌出版社
- 喜田貞吉 1931「マツト」と「ケツト」『歴史地理』第58巻第5號 1-14頁 日本歴史地理學會
- 清野謙次 1928a「北海道東北部に於ける人類學的探究紀行」(根室附近の探求)『民族』第3巻第2號 115-121頁 民族發行所
- 清野謙次 1928b「北海道東北部に於ける人類學的探究紀行(承前)」(網走附近の探求)『民族』第3巻第3號 117-123頁
- 清野謙次 1969『日本貝塚の研究』岩波書店
- 甲野勇編 1964『日本原始美術』2 土偶・装身具 講談社
- 河野廣道 1932a「アイヌの一系統サルンクルに就て」『人類學雜誌』第47巻第4號 137-148頁 東京人類學會
- 河野廣道 1932b「膽振國千歳村火山灰下の堅穴遺跡」『人類學雜誌』第47巻第5號 165-177頁
- 河野廣道 1933「オホーツク式土器群」『北海道原始文化聚英』19-20頁 民族工藝研究會
- 河野廣道 1958「先史時代篇」『網走市史』上巻 先史時代篇・歴史時代篇 11-270頁 網走市史編纂委員會
- 河野広道博士没後二十年記念論文集刊行会 1984「年譜」『河野広道博士没後20年記念論文集』462-463頁
- 河野本道選 1984「『啓明会』往復書翰」『アイヌ史資料集』第2期第7巻(河野常吉資料編1ノ2) 北海道出版企画センター
- 後藤壽一 1934「北海道の先史時代についての私見」『考古學雜誌』第24巻第11號 9-27頁 考古學會
- 駒井和愛編 1964『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』下巻
- 尾川會編 1933a「北海道原始文化要覽」民族工藝研究會
- 尾川會編 1933b「北海道原始文化聚英」民族工藝研究會
- 齋藤忠 1933「千島樺捉島出土の土器及び石器」『考古學雜誌』第23巻第6號 1-12頁
- 杉浦重信 1991「道北先史研究会とその人々」『名寄市郷土資料報告』第7集 1-6頁 名寄市郷土資料室
- 杉浦重信 1999「千島・カムチャッカの様相」『シンポジウム 海峡と北の考古学—文化の接点を探る—資料集Ⅱ』183-208頁 日本考古学協会 1999年度釧路大会実行委員会
- 梶田光明 2010『標津川河岸遺跡—平成20年度標津川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』標津町教育委員会
- 梶田光明 2013『古道第6遺跡—標津川改修工事の内シユラ川築堤工事に伴う発掘調査報告書—』標津町教育委員会
- 梶田光明・梶田美枝子 1982『史跡標津遺跡群 伊茶仁カリカリウス遺跡発掘報告書—昭和56年度標津遺跡群保存修理事業—』標津町教育委員会
- 杉山壽榮男 1928『日本原始工藝』工藝美術研究會
- 武笠耕三 1934「南千島の旅」『蝦夷往来』第13號 14-23頁 尚古堂
- 武田修編 1996「常呂川河口遺跡(1)—常呂川右岸掘削工事に伴う発掘調査報告書—」常呂町教育委員会
- 千島教育回想録刊行会 1977『千島教育回想録』
- 千葉大学文学部考古学研究室編 2008『北海道標津町伊茶仁ふ化場第1遺跡 第4次発掘調査概報』
- 千葉大学文学部考古学研究室編 2011『北海道標津町伊茶仁ふ化場第1遺跡 第7次発掘調査概報』
- 豊原熙司・川上 淳・本田克代 1996「根室地方で採録されたアイヌ語—明治時代以後—」『根室市博物館開設準備室紀要』第3号 91-110頁
- 鳥居龍藏 1903『千島アイヌ』吉川弘文館
- 長尾又六 1932a『先住民族の遺物』(謄写版)
- 長尾又六 1932b『先住民族の遺物』(謄写版)
- 長尾又六 1933a「根室辨天島に就いて」『蝦夷往来』第9號 98-101頁 尚古堂
- 長尾又六 1933b「根室辨天島に就いて」『根室千島兩國郷土史』(本城玉藻編) 123-124頁
- 長山明弘 2010「動物形象突起についての覚え書き—突起・把手に関する研究のあゆみ—」『土器型式論の実践的研究』千葉大学人文社会科学部研究科研究プロジェクト報告書 第128集 69-102頁 千葉大学人文社会科学部研究科
- 長山明弘 2014a「カリカリウス土器群」の編年と当幌川遺跡出土土器の再検討』『古代』第134号 117-166頁 早稲田大学考古学会
- 長山明弘 2014b「加曾利E(新)式土器研究の歩みと針路—土器論を基礎とした先史文化の研究に向けて—」千葉大学考古学叢書6 那珂川書房
- 長山明弘 2015a「オホーツク式土器」の突起・把手』『考古学論攷Ⅱ』千葉大学文学部考古学研究室(投稿中)

- 名取武光 1934a「土器から見た北海道の史前文化」『北海 趣味の雑誌』第1巻第4号 2～5頁 北海社
- 名取武光 1934b～e「オホーク海岸の原始時代と北方文化(一)～(四)」『北海タイムス』(昭和9年11月30日、12月1日、12月2日、12月4日)【日刊紙、表題「オホーク」は原文のまま】
- 名取武光 1936『北日本に於ける動物意匠遺物と其の分布相』北大博物館報告 北海道帝國大學農學部附屬博物館
- 名取武光 1939「北海道の土器」『人類學・先史學講座』第10巻 1-42頁 雄山閣
- 名取武光 1948『モヨロ遺跡と考古學—私たちの研究—』講談社支社札幌講談社
- 名取武光 1974「南千島の発掘旅行記—四十年前の南千島紀行—」『アイヌと考古学(二)』名取武光著作集Ⅱ 4-49頁 北海道出版企画センター(1939年8月発行の単著を補筆)
- 野村崇 1992「表紙写真にちなんで 熊の頭の注ぎ口をもつ把手付き土器」『北海道北方博物館交流協会会誌 北方博物館文化交流』第6号 頁記載なし(表紙及び見返し部分) 北海道北方博物館交流協会
- 野村崇・平川善祥ほか 1982『ニツ岩』北海道開拓記念館研究報告第7号 北海道開拓記念館
- 平光吾一 1928「所謂千島アイヌ族の現状と同種血球凝集反應に就て」『人類學雜誌』第43巻第12号 515-536頁
- 平光吾一 1929a「千島及び辨天島出土土器片に就て(一)」『人類學雜誌』第44巻第4号 131-143頁
- 平光吾一 1929b「千島及び辨天島出土土器片に就て(二)」『人類學雜誌』第44巻第5号 192-200頁
- 平光吾一 1929c「千島及び辨天島出土土器片に就て(三)」『人類學雜誌』第44巻第7号 384-389頁
- 平光吾一 1929d「アイヌ人同種血球凝集反應と海馬注口土器發見の價値」『人類學雜誌』第44巻第12号 602-611頁
- 北海道札幌師範學校編 1936『北海道札幌師範學校五十年史』
- 北海道帝國大學附屬博物館・札幌市屋川會 1932『第一回北海道先史時代遺物展覽會陳列品目録』〔蝦夷往來第6号特輯號〕書肆尚古堂
- 北海道聯合教育會編 1926『北海道教育關係職員録 大正十五年十月調査』
- 北海道聯合教育會編 1927『北海道教育關係職員録 昭和二年六月調査』
- 本田克代・村田吾一 1980『国後島の遺物 付篇 国後島の想い出』羅臼町文化財報告5 羅臼町教育委員會・羅臼町郷土史研究会
- 前田 潮・山浦 清編 2004『根室市トーサムポロ遺跡 R-1 地点の発掘調査報告書—オホーツク文化末期の堅穴群—』北地文化研究会
- 松井彦松 1977「島での災難 作喜校と古釜布校」『千島教育回想録』163-172頁 千島教育回想録刊行会
- 松下亘 1968「北海道とその隣接地域の動物意匠遺物について」『北海道考古学』第4輯(名取武光先生退官記念号) 64-87頁 北海道考古学会
- 松下亘・米村哲英・畠山三郎ほか 1964『知床岬—知床半島の古代文化をさぐる—』市立網走郷土博物館報告1 市立網走郷土博物館
- 村田吾一・本田克代 1969「国後島の遺物」『北海道考古学』第5輯 87-99頁 北海道考古学会
- 山内清男 1933「日本遠古之文化 七 縄紋式以後(完)」『ドルメン』第2巻第2号 49-53頁 岡書院
- 山内清男 1939『日本遠古之文化』補註付・新版 先史考古學會
- 山内清男編『日本原始美術』1 縄文式土器 講談社
- 柳澤清一 1999「北方編年小考—ソーメン土器とトビニタイ・カリカリウス土器群の位置—」『茨城県考古学協会誌』第11号 77-92頁 茨城県考古学協会
- 柳澤清一 2001「禮文・利尻島から知床・根室半島へ—道北・道東「オホーツク式」トビニタイ・擦紋土器編年の対比—」『先史考古学研究』第8号 65-105頁 阿佐ヶ谷先史学研究会
- 柳澤清一 2008a「トビニタイ土器群Ⅱの小細別編年について」『千葉大学人文研究』第37号 1-60頁
- 柳澤清一 2008b「カリカリウス土器群」の小細別編年について『物質文化』第85号 65-91頁
- 柳澤清一 2008c『北方考古学の新天地—北海道島・環オホーツク海域における編年体系の見直し—』六一書房
- 柳澤清一 2011『北方考古学の新展開—火山灰・蕨手刀をめぐる編年体系の見直しと精密化—』六一書房
- 柳澤清一 2012「環根室海峡圏における貼付紋系土器の対比—南千島への「駆逐・移動」説をめぐって—」『千葉大学文学部考古学研究室 30周年記念 考古学論叢Ⅰ—岡本東三先生退職とともに—』645-664頁 千葉大学文学部考古学研究室・六一書房
- 柳澤清一 2013「北方編年再考 その(11) いわゆる「東大編年」と山内博士「北方編年」説の相克」『千葉大学 人文研究』第42号 57-140頁
- 山本栞藏 1929「圖版説明」『東北文化研究』第2巻第2号
- 山本三生編 1930『日本地理大系 10 北海道、樺太篇』改造社
- 米村喜男衛 1950『モヨロ貝塚資料集』網走郷土博物館・野村書店

米村喜男衛 1969『モヨロ貝塚 古代北方文化の発見』講談社

涌坂周一 1991『オタフク岩遺跡（第Ⅰ地点・第Ⅱ地点・洞窟）』羅臼町文化財報告 14 羅臼町教育委員会

涌坂周一 2002『隧道丘陵地遺跡』羅臼町文化財報告 18

執筆者不詳 1930「故河野常吉氏小傳」『札幌博物學會々報』第 11 卷第 3 號 190-194 頁 札幌博物學會（原文に記名は無い。石村義典に拠れば、この文章は河野常吉が 1919 年頃に記した草稿に第三者が手を入れたものと云う（石村 1998：456））

図版出典

第 1 図 「国土地理院地図」（電子国土 Web）を参照して作成

第 2 図 1～4・7・8：梶田 2013, 5；千葉大学文学部考古学研究室編 2008, 6・9；梶田 2010, 10・12a, 17～19・22・27；五十嵐 1989, 11・21；宇田川 1971, 12b；杉山 1928, 13・14・23；涌坂 1991, 15；千葉大学文学部考古学研究室編 2011, 16・26；梶田・梶田 1982, 24；駒井編 1964, 25；前田・山浦編 2004

第 3 図 1・4・5・7・13・14：平光 1929b, 2・25；涌坂 1991, 3・10；涌坂 2002, 6・21；梶田・梶田 1982, 8・9；駒井編 1964, 11；五十嵐 1989, 12・23・24；加藤・内山・木山ほか 2006, 15；武田編 1996, 16；松下・米村ほか 1964, 17・20；前田・山浦編 2004, 18；本田・村田 1980, 19；五十嵐 1989, 柳澤清一氏・長山撮影（旭川市博物館所蔵河野資料）, 22；杉山 1928, 26a；喜田 1928, 26b；犀川會編, 26c；山内編 1964, 26d・e；右代 1982

- ※ 特に明記していないが、各図版に対して筆者の判断で細かな調整を加えている。第一次報告者のご寛恕を乞う。
- ※ 図版中に添えた線描（模式図）は、写真図版などを参照して筆者が作成したものである。
- ※ 附表の記載について、二次的な引用を主体とする文献については省略したものがある。また 1970 年代以降、二次的な引用が増加する傾向がある。このため、記載は概ね 1970 年までに発表された論攷に限定した。

附表 ポンキナシリ遺跡とその学說的展開

文 献	記載内容の要約 (文献欄の「*」は「動物意匠を有する注口・把手付土器」に言及しないもの)
喜田 1928 (近江正一報)	ポンキナシリ遺跡の竪穴出土の「動物意匠を有する注口・把手付土器」の基礎文献である。この資料を「獸面口付壺形土器」と呼称。「獸」はクマの表現とし、注口部に顔、把手部に尾が表現されていると見る (55頁)。近江正一の書信を喜田貞吉が紹介したものの。
宇田川校註 1983 (『河野常吉ノート』)	事実記載の内容は上記文献とほぼ同じである。「動物意匠を有する注口・把手付土器」を「土偶を具備した土製壺」と呼称 (54頁)。「研究発表」(詳細不明)としてポンキナシリの竪穴に居住した「先住民族」が「分業制度」をとり、土器は専門工人によって「製造所」から供給されたものとする (56頁)。この文献は著者不明の謄写版として残され、1983年まで未発表。上記文献と内容を同じくすることから、基本骨子は近江に拠って同じ頃に記されたものと推定される。
平光 1929a～d	「海馬の注ぎ口土器」と呼称する (1929c: 386頁)。「此の土器の最も特異とするは注ぎ口が海馬の頭に成ることで、(中略)取手は又よく整ひ、上に海馬の軀(マ、[マ])が這ひ上られる様を刻れり。恨むらくは海馬の軀の頭は破損して無けれども其の脚の鱗状をなす形態より押し海馬なることは疑ひない。此の軀が海馬なることよりして注ぎ口の海馬の頭なることも殆ど確實に推定出来る」と説明する (199頁)。平光は基本的に「オホーツク式土器」を縄紋土器の一種とし、「アイヌ人」が製作したものであると考える (1929c・d)。これは清野謙次の「日本石器時代人非アイヌ説」に対する反論となっている。
北海道帝國大學 附属博物館・ 犀川會 1932	北海道帝國大學農学部附属博物館(現北海道大学北方生物園フィールド科学センター植物園)の所藏品として、「國後」出土の「海馬の頭形片口ある浮紋土器」(目録番号 163) を出品 (16頁)。この文献は出品目録で、図版の提示はない。
山内 1933*	ポンキナシリ遺跡出土の深鉢形土器 (第3図1・4=平光 1929b: 第7圖) を図示。「縄紋以後の土器のうち、他の一類即ち浮紋のある仲間も亦、北海道一般に分布している」と説明する (51頁)。これらの土器は、1939 (昭和14) 年12月発行の『日本遠古之文化』補註付・新版で、狭義の「オホーツク式土器」(壺形) と差し替えられている (山内 1939: 第6圖, 柳澤 2012: 646)。
犀川會編 1933a	「北海道出土各種土器 9 注口土器 國後島」として写真 (第3図26b) を提示。この写真は、平光 (1929a) と構図がほぼ同じである。しかし、土器に石膏が入れられていることから、新たに撮り下ろしたものと推定される。なお「出品目録」には本資料に該当するものが見当たらない。北海道帝國大學附属博物館所蔵、南千島出土の土器としては「目録番号1」がある。しかし、この資料は「高さ30 釐口径21 釐」と記載があり、大きさが合わない。
河野 1933	「オホーツク式土器群」の説明で、「著名な海馬注口土器もこの形式(マ)に属する」と説明 (19頁)。なお『北海道原始文化聚英』(犀川會編 1933b) には、この資料の図版は掲載されていない。
名取 1934a	「北方文化を代表するオホーツク式土器(マ)」として図示 (第4圖)。
後藤 1934*	「オホーツク海系の土器」のとして、ポンキナシリ遺跡出土の深鉢形土器を図示 (第2圖4=第3圖4), 説明を加える (25-26頁)。この図版は、平光論文の写真 (1929b: 第7圖K3) と構図が異なるので、新たに撮り直したものであろう。なお根拠は不明だが、後藤壽一は「オホーツク海系の土器」が擦紋土器と一部並行し、「擦紋土器が影を潜めても尚二百年程も存続する」と考えている (23頁)。後に後藤は、山内清男が主宰する先史考古學會の会員となる(「會員氏名」(表紙裏), 昭和12年5月10日発行『先史考古學』第1巻第3號)。この論文では、河野廣道の教示を受けたことが記されているが、「孰れが古いかかに就いては積極的な証據はないが、沈紋ある式が古く、浮紋ある式が新しいものと推定される」(擦紋土器→オホーツク式土器) という山内の見解 (山内 1933: 51) からの影響も考慮する必要があるだろう。
名取 1934e*	「北方土器 國後島出土 (近江正一氏發見)」として写真を提示。この写真は、その構図などから北海道大学植物園・博物館所蔵「標本番号 HUNHM39283」のガラス乾板 (加藤 2001: 33, 加藤編 2012: 図版 205) に拠るものと推定される。
名取 1936	『北海道原始文化要覽』(犀川會 1933a) と同一の写真を提示 (第8圖=第3圖26b)。この土器を「海馬の注口型のオホーツク式土器」と呼称し (9頁)、「魚の頭部を注口部に形象し、把手の上に海馬らしい四足類を付けてある」と説明する (10頁)。
名取 1939*	「第5類 オホーツク式土器群」(マ) としてポンキナシリ遺跡出土の深鉢形土器を図示 (第13圖4=第3圖4)。これは、後藤論文と同じ写真 (後藤 1934: 第2圖4) を若干縮小したものである。
名取 1948	「オホーツク式土器」(マ) として線描画を図示 (第30圖)。これは、北海道大学植物園・博物館 (北海道大学北方生物園フィールド科学センター植物園) 所蔵「標本番号 HUNHM39283」の写真を模写したものである。
米村 1950	名取の意見 (名取 1936 など) を引き、「海馬の形をした注口土器」(70頁, 圖版 39-6), 及びポンキナシリ遺跡出土の深鉢形土器 (圖版 39-7=第3圖4) の写真を提示。「圖版 39-7」は、後藤論文と同一のもの (後藤 1934: 第2圖4) だが、「圖版 39-6」は第3圖26c に似ているものの、新たに撮影し直したものと推定される。
河野 1958	「オホーツク式D型 (ソーマン状貼附土器)」の項目で、「平光吾一 (昭和十四年十二月) はこの型に属する國後出土の海馬注口土器をもつて縄文土器の型式と見なし、アイヌ人の作であるとしている【平光 1929d: 603-606】」と説明する (【】内は引用者, 123頁)。
山内編 1964	新規撮り下ろしと推定される写真を提示 (参考図版 230=第3圖26c)。説明書きに「230 オホーツク式 南千島國後島・ポクナシリ遺跡高 21.5cm」とある。この資料について、北海道大学植物園・博物館の所蔵データでは、採集地が「ポクナシリ」と記録されている (加藤 2001: 20)。またこの資料は「高さ19cm」と紹介される場合が一般的であったが、「高21.5cm」は後に計測された実寸「21.6cm」(右代 1982: 53) と符合する。おそらく資料を掲載するにあたって、大場利夫が実際に資料を細かく再検したものと考えられる。
駒井編 1964	トコロチャン跡遺跡1号竪穴から出土した動物意匠の認められる「角状突起」(長山 2015a: 第6圖1) と関連して、平光論文 (1929a～c) を引き、「國後島ポンキナシリにおいて、海馬の頭部をかたどった注口土器が出土しているとのことである」と言及 (22頁, 註15)。
甲野編 1964	「図版番号 241」として、写真を提示 (第3圖26c)。この土器について大場利夫が「本例は鬚形注口土器で、口縁上に口をあいた動物の頭がつくられ、動物の口が土器の注口に作出されている。反対側の口縁部は把手につくられ、ここにも動物が見られる。注口部の動物は海獣か大型の魚類であるように見える。また把手は破損しているが、海獣の足らしいものが残っている」と説明する (188頁)。なお、この写真は、『日本原始美術』1 (山内編 1964: 参考図版 230) と共通のものである。
松下 1968	「北海道と千島の関係で、明白な遺物は國後島出土の魚とト下のデザイン」の注口土器であり、この土器の文様からみると、明らかにe群【藤本 強 1966「オホーツク土器について」『考古学雑誌』第51巻第4号 28-44頁 日本考古学会】の時期のものである」と言及 (【】内は引用者, 70頁)。
大塚 1968	「遺跡は國後島ポンキナシリ遺跡(マ)にある。ここから、注口部にトドを形どった土器が発見されている。この把手の部分には、幼ないトドがとりつけられている。オホーツク期後半に位置する貼付文の時期のものである」と言及する (27頁)。
大場 1971	新たに撮り直した写真を提示 (写真1左下)。平光論文 (1929b・c), 名取論文 (1936) を引いて、注口部の動物意匠が海馬と云われていることを説明 (7頁)。このほかに北海道大学農学部附属博物館 (当時) が所蔵するポンキナシリ遺跡の出土土器を2点紹介。図版の提示はないが、記述から判断して第2圖10例, 第3圖13例を指すと考えられる。
大沼 1971	浜別海遺跡 (別海町) 出土の「貼附式浮紋土器」を「第Ⅲ群土器」とし、さらにA～Eの5類に分ける。A類は「やや平たくされた断面四角形の貼付文によって文様が構成され」るもので、「國後島ポンキナシリ出土の所謂海馬注口土器に酷似している」と説明する (147-149頁)。A類は「カリカリウス土器群」の破片を含み「貼附式浮紋土器」の後半にあたる資料である。B類は「カリカリウス土器群」に似るもの。C・D・E類は、「指圧式浮紋」と擬縄貼附線、そして櫛歯状器具による条線 (或いは沈線) を組み合わせて文様を形作る土器で、「トビニタイ土器群Ⅰ・Ⅱ」を含む。大沼は、これらの年代的な位置について「藤本強氏の述べるe群【藤本 1966】に相当するものとし、「A～E類がすべて時間差をもつと仮定して関連をたどれば、A→B→C→D→Eとなる」と考察している (150頁)。さらに当時 (1970年代前半), 所謂「接触型式」に関する議論が注目を集めていたことに関連して、「山内清男博士が古く浮文ある式として、千歳神社裏出土の擦文土器【河野 1932b: 第7圖】すなわち沈文ある式に対比させたのは、この群【第Ⅲ群土器】に近似する國後島ポンキナシリの資料【平光 1929a～c】であった【山内 1933: 50-53】。この國後島ポンキナシリの資料の一部は、名取光氏によってオホーツク式土器の例とされている【名取 1938: 9-10】と説明し、「この種のもの【第Ⅲ群土器】は擦文とオホーツク式(マ)の間に生じたものとするよりも、オホーツク式の最終末の姿として扱えられよう」と考察している (【】内は引用者, 153頁)。

『型式論の実践的研究Ⅲ』（2015. 2. 28 発行）正誤表

下記の論文には誤植があります。以下のように訂正をお願いいたします。

長山明弘「国後島ボンキナシリ遺跡の再吟味」『型式論の実践的研究Ⅲ』 pp.181 - 196（正誤表）

182 頁	下から 6 行目	「校長を勤め」→「校長を <u>務</u> め」
184 頁	上から 21 行目	「平光 1929 : 196」→「平光 1929 <u>b</u> : 196」
189 頁	補註 4 の 1 行目	「それは、①河野常吉」→「それは、①河野常吉」
191 頁	補註 16 の 3 行目	「(河野編 1984 : 59)」→「(河野選 1984 : 59)」
	補註 18 の 1 行目	「アーノルド・グブラー」→「アーノルド・ <u>グ</u> ブラー」
196 頁	後藤 1934 の 1 行目	「「オホーツク海系の土器」のとして」→「「オホーツク海系の土器」 <u>と</u> して」
	大場 1971 の 1 行目	「新たに <u>撮</u> り直し」→「新たに <u>撮</u> り直し」